

農業地帯の中須田駅近くを走る江差線。冬は日本海からの地吹雪で運行がストップすることもしばしば



# 江差線10駅 最後の夏

## 8 中須田



中須田駅は水田や畑が広がる農業地帯の一角にあった。古畑駅や桂岡駅と同様、無人の駅舎は鉄製の貨物列車の車掌車を改造。ホームに降り立つと、近くで栽培するニラの香りが漂っていた。

江差線が全線開通した1936年(昭和11年)当時、中須田地区近隣では上ノ国駅と桂岡駅しかなかった。両駅まで2〜3分。住民は戦後、道や国鉄に駅新設を陳情。48年に住民総出でホームと木造の駅舎をこしら

■メモ 上ノ国町中須田、1955年3月5日開業。臨時乗降場から駅に昇格後も職員を当初から配置しない無人駅。86年に貨物列車の車掌車を改造した現駅舎を設置した。木古内駅からは32・8分。

# 住民総出 手作りで誕生



住民手作りで完成させた中須田駅のホーム

え、一部の列車が停止するに人だかりがして住民みんな中須田臨時乗降場として開きで迎え、手をたいて設した。中須田地区の住民「喜んだ」という。中須田臨時乗降場はその後、55年に正式に駅となった。「俺たちが車の免許を取った。金子さんも雨籠や江差たのが悪かったかな。何だ鶴雄さん(81)は、乗降場建まで、買い物や遊びに出かかもつたいない。汗を流しける時は中須田駅から満員駅をつくった方々に申し訳列車に揺られた。しかし、ない」と、しみじみ語り合の指示に従い、馬車で砂利の利用者は減少。金子さう一度列車に乗ってあげなを運んでホームの土を盛っも車の免許取得後は江差いとね」。金子さんは中須田駅のホームを見つめなが

時の感動も覚えており、「駅た。田駅のホームを見つめながらつふやいた。